

神経芽細胞腫マススクリーニングで発見された337例。

— 1988年度までの集計結果から —

(分担研究：現行マス・スクリーニングの問題点に関する研究)

沢田 淳*

要約：1985年から神経芽細胞腫のスクリーニングが全国的に実施され、1988年にはVMAのみの定性検査からHPLC（高速液体クロマトグラフィー）を使ったVMA、HVA、クレアチニンの定量によるスクリーニングの実施が推奨され発見例が増加した。1988年度末までに発見・診断された例は337例に達したので臨床的な分析を試みた。1987年までの発見頻度は1/15,000であったが、1988年には1/8,429となり、発見率がHPLCの導入によって増加した。337例の生存率はこれまでの結果と同様97%と高かったが、発見例を全例フォローアップできていないと思われた。今後、現在約75%の受検率の増加とフォローアップの完全さのための工夫が必要である。

見出し語：神経芽細胞腫、スクリーニング、頻度。

研究方法：1988年度までに日本小児がん研究会神経芽腫委員会に集計された神経芽細胞腫337例を、全国の神経芽腫委員（下段）により集計された登録調査票により分析した。

結果：

1. 年度別受検率（表1）：1985年の全国実施までは各地区で個別に行われていたが、1985年には出生数をもとにした時の受検率は58.6%（834,536/1,425,043）になり、その後、漸増して1987年以降には75%を越えるようになったが、今後、さらに増加するように努力が必要である。
2. 年度別発見数と頻度（表1）：1984年度までに発見されたのは51例であったが、その頻度は母数が不明なために算出できない。その後、主に、VMA定性法で行われていた時期には約

京都府立医科大学小児科 (Dept. of Pediatrics, Kyoto Prefectural Univ. of Medicine)

神経芽腫委員会：沢田 淳（委員長）、永原 暹（副委員長）、秦 温信、武田武夫、大井龍司、山本圭子、岡部郁夫、小出 亮、橋都浩平、大川治夫、角田昭夫、塙 嘉之、桜井 実、上田一博、木村 茂、中川原 章、松井一郎。

1/15,000で、受検数の増加に伴って発見数が増加した。さらにその後のHPLCでの定量によるスクリーニング数の増加—約50万人—につれて発見例が増加し、頻度も1/8,500と高まった。

3. 337例の分析：1976年から委員会に登録された337例について、診断時に症状があったのは5例(2%)のみ、診察時に異常のあったのは腹部293例の中152例、縦隔部42例では0で、多くの例が無症状、無所見で発見されている。原発部位や組織像にはスクリーニング発見例に特徴はなかった。病期は予後良好なI, II, IVs期が252例(75%)を占めたが、進行したIV期が26例(8%)にみられた。生存例は328例(97%)、死亡7例(腫瘍死3例、術中死その他4例)、追跡不能2例であった。

考察：1974年スクリーニング開始以来1988年末までの受検数・率、神経芽細胞腫発見例・頻度の推移を示した。今後、HPLCによるスクリーニング数の増加によりさらに多くの例が発見されると予測されるが、現在、受検率が75%で、今後、その向上のための施策が必要と思われた。さらに集計できた337例は行政で集計された例の90%以上と推定されるが、100%集計への努力が必要である。

文献

1. 沢田 淳：日本小児がん研究会・神経芽腫委員会報告：神経芽腫マスキングの全国集計結果。第5回日本小児がん研究会。平成元年11月28日。東京都。

神経芽腫スクリーニング受検者数・年度別発見数および頻度

	対象者数(出生数)	受検者数	受診率	NB例	頻度
1985	1,425,043	834,536	58.6%	56	1/14,902
1986	1,374,666	997,643	72.6%	66	1/15,116
1987	1,332,491	1,024,841	76.9%	88	1/11,645
1988	?	1,036,740*	?	123	1/8,429
		3,893,763		333	1/11,693

*定性法 508,924

定量法 527,816



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:1985年から神経芽細胞腫のスクリーニングが全国的に実施され、1988年にはVMAのみの定性検査からHPLC(高速液体クロマトグラフィー)を使ったVMA、HVA、クレアチニンの定量によるスクリーニングの実施が推奨され発見例が増加した。1988年度末までに発見・診断された例は337例に達したので臨床的な分析を試みた。1987年までの発見頻度は1/15,000であったが、1988年には1/8,429となり、発見率がHPLCの導入によって増加した。337例の生存率はこれまでの結果と同様97%と高かったが、発見例を全例フォローアップできていないと思われた。今後、現在約75%の受検率の増加とフォローアップの完全さのための工夫が必要である。